

井上哲次郎における「日本哲学」国際発信の試み

——国際東洋学者会議における発表論文を中心に

水野博太

井上哲次郎のいわゆる「三部作」は、例えば『日本陽明学派之哲学』の序文で「現今に於ける社会的病根」を治療し「国民的道德心」を作興する意図が述べられていることから、これまで井上の「儒教イデオログ」的側面と絡めて論じられてきた。一方で、同じ序文中で述べられているように、それは「明治三十年」に開催された「仏国巴里府開会の万国東洋学会」で行った発表「日本に於ける哲学思想の発達」の延長線上に位置するものでもあった。近年では井上の「三部作」中に見られる陽明学理解に水戸学の影響を見出すことで、彼の儒学解釈における「前近代」との関連を強調する研究もあるが、少なくとも井上の記述に基づくならば、井上の「三部作」は、世界（西洋）に対して「日本哲学」をいかに発信するかという、極めて「近代」的な問題意識からスタートしたという側面を見落とすべきでない。

本報告では、上記の井上発表論文の内容、およびその背景にあった「日本哲学」をめぐる当時の西洋人の認識を検討することで、井上がどのような意図から「三部作」の原型となった発表を行ったのかを明らかにする。当時日本を知る西洋人は、「日本に独自の哲学は存在しない（中国やインドの影響を出ない）」「日本人は抽象的思考に欠け哲学には向かない」と認識していた。井上はこれに対し、後の「三部作」で中核をなす江戸時代の儒学者たちを取り上げ、彼らが単なる中国の模倣を超えた独自の「日本哲学」と呼ぶべき知的営為を行っていたことを示そうとしたのだった。

それでは、井上の「日本哲学」存在証明の試みは成功したのだろうか。結論を言えば、必ずしも成功したとは言えない。世界（西洋）は、井上が示した形では「日本哲学」の独自性を認めなかったように思われる。しかしながら、それとは別の形で、「陽明学」を媒介とすることで、井上哲次郎は西洋のシノロジストたちに少なからぬ影響を与えることになる。

以上